

# ジレンマ判断と態度との関連について

— 命の選択を規定する要因 —

Relation about life-related choices and personality characteristic.

北折 充 隆<sup>1)</sup>

Mitsutaka KITAORI

小 嶋 理 江<sup>2)</sup>

Masae KOJIMA

## 【問題と目的】

民主主義国家は多様な価値観を内包するが故、意見が対立することは免れない。それ故、それぞれの立場に基づいた様々な主張がぶつかり、また多様な物の見方・視点を目に行うことができる。このような主張のやりとりを、多くの人が目にして議論に参加し、精練されていくというのが、民主主義の理想的な姿であり、基本的な考え方である。

しかし、現実場面においては、そうした理想的な議論が展開されるばかりでなく、一方的な主張を押し通したり、他者に大きな不利益が及ぶ決定がなされてしまうことも多い。そこで通常は、相互の権利や自由、安全を保障し合うべく、ルールなどを設定し、行動を規制し合うこととなる（北折，2017）。もちろんルールによる規制は、弱者の保護や不利益回避を目的としたものばかりではない。文化圏や時代に依存した、宗教的観点や共有された価値観に基づくものも存在する。

そして、これら全てに共通するのが「正しい」という、個人が内在化したり集団で共有されたりした信念である。自身の考えが間

違ってるとか、他の意見の方が正しいと認識していた場合、認知的に不協和（Festinger, 1957）となるため、過度に他の意見を排除するもしない限り、「正しい」という確信を保つことはできない。

この「正しい」という認知は、立場や注目する規範が異なれば、全く相反するものを正しいと捉えることもあり得る。このため、時にかみ合わない論争を引き起こしたり、争いの原因ともなりうる。例えばCialdini, Kallgren, & Reno (1991) は社会規範について、イデオロギーや道徳的観点からではなく、命令的規範 (injunctive norm) と記述的規範 (descriptive norm) という、二つの心理的側面から捉えている。命令的規範とは、「多くの人々がとるべき行動や、望ましい行動と評価するであろうとの、個人の知覚に基づく規範」と定義され、社会的報酬や罰をもって行動を志向し、法律の形成とも密接に関連している。もう一つの記述的規範は、「多くの人々が実際にとっている行動であるとの、個人の知覚に基づく規範」と定義され、周囲の他者がとる行動を、その状況における適切な行動の基準であると認知する (Gilbert, 1995)。こうした行動判断は、実社会では非常に合理的であり、

1) 金城学院大学人間科学部

2) 名古屋大学未来社会創造機構

考える時間や手間を省かせ、高い確率で効果的な結果を得ることができる。

この二つの規範の食い違いについて、例えば北折（2013）では、夜間の国道における制限速度を例に挙げている。制限速度の遵守は、広く共有された命令的規範であり、多くの人が従うべきものであると考えている。その一方で、交通量の少ない夜間の幹線国道では、制限速度を遵守しているドライバーはほとんどいない。つまり、周囲の多くの人が実際に取っている行動として、制限速度以上のスピードで走行しており、車の流れに乗ることは、記述的規範に従っていることを指す。

この状況では、「制限速度を守る（命令的規範を遵守）」と「車の流れに乗る（記述的規範に従う）」という、二つの規範の方向がずれている。どちらの規範に準拠している人もそれを正しいと考えているため、「制限速度をきちんと守っている自分が、正しいに決まっている！」「深夜の幹線国道で、制限速度を守る必要がどこにあるのだ？車の流れに乗って走るのが正しいに決まっている！」などと、平行線のまま正当性の主張が繰り返されることになる。

「正しい」という信念は、強固に個人に内在化されている一方で、その根拠が単一でない。このため、どちらも正しいながら、結論が真逆の事象について、どちらよりも正しいのか、どういった選択がより望ましいのかといった議論が、哲学や倫理学の領域においてなされてきた。その最も有名なものが、トロッコ問題（Philippa, 1967）と呼ばれる、「ある人を助けるために他の人を犠牲にするのは許されるか？」という倫理学の思考実験である。

トロッコ問題とは、「線路を走っていたトロッコ（電車）の制御が不能になり、このままでは前方で作業中だった5人が、猛スピードのトロッコに轢き殺されてしまう。この時、

たまたま線路の分岐器のすぐ側に人がおり、その人がトロッコの進路を切り替えれば、5人は確実に助かる。しかし、その別路線でも1人が作業をしており、5人の代わりにその1人がトロッコに轢かれて確実に死ぬ。このとき、トロッコを別路線に引き込むべきか？」という枠組みで、進路を切り替えるべきか否かを判断するものである。

この問題は、功利主義的な観点から基づく「正しさ」と、義務論的観点からの「正しさ」の、いずれに準拠するのかで全く異なる結論となる（Sandel, 2009）。突き詰めればこの問題は、5人を助ける為ならば、他の1人を殺してもよいかという議論であるが、Bentham（1948）による、最大多数の最大幸福という功利主義の考えに基づくなら、一人を犠牲にして五人を助けるべきであり、トロッコを別路線に引き込むことが正しい判断となる。しかし、カント（1976）の提唱する理性に基づく、“善い意思”を主軸とする義務論に従えば、誰かを他の目的のために利用すべきではないため、この場合は分岐器を触るべきではなく、五人を見殺しにすることが正しい選択となる。

このような、命の選択をせねばならないような状況下で、人がどのような判断を下すのかについて、心理学の領域では、主に道徳心理学で議論がなされてきた。Kohlberg（1967）は、モラルが葛藤する状況を設定し、道徳性の発達について、3つの水準からなる6つの段階を提唱している（Table 1）。これは、ハインツのジレンマに代表されるような、二つの正しさが葛藤する場面を提示し、どういった回答をするのかで、どの段階かを判断するものである。

ハインツのジレンマとは、『一人の女性（妻）が病気で死にかけているが、同じ町に住む薬剤師が開発した薬によって助かる可能

Table 1 6つの道徳発達段階 (Kohlberg, 1967より)

水準1：道徳的価値は人や規範にあるのではなく、外的、準物理的な出来事や悪い行為、準物理的な欲求にある。	
段階1〈服従と罰への志向〉	優越した権力や威信への自己中心的な服従、または面倒なことを避ける傾向。客観的責任。
段階2〈素朴な自己中心的志向〉	自分の欲求、時には他者の欲求を道具的に満たすことが正しい行為である。行為者の欲求や視点によって価値は相対的であることに気づいている。素朴な人類平等主義および交換と相互性への志向。
水準2：道徳的価値はよいあるいは正しい役割を遂行すること、慣習的な秩序や他者からの期待を維持することにある。	
段階3〈よい志向〉	他者から是認されることや、他者を喜ばせたり助けることへの志向。大多数が持つステレオタイプのイメージあるいは当然な役割行動への同調。意図による判断。
段階4〈権威と社会秩序の維持志向〉	「義務を果たし」、権威への尊敬を示し、既存の社会秩序をそのもの自体のために維持することへの志向。当然な報酬としてもたれる他者の期待を尊重する。
水準3：道徳的価値は、共有されたあるいは共有されうる規範、権利、義務に自己が従うことにある。	
段階5〈契約的遵法的志向〉	一致のために作られた規則や期待が持つ恣意的要素やその出発点を認識している。義務は契約、あるいは他者の意志や権利の冒涇を全般的に避けること、大多数の意志と幸福に関して定義される。
段階6〈良心または原理への志向〉	現実的に定められた社会的な規則だけでなく、論理的な普遍性と一貫性に訴える選択の原理に志向する。方向づけをなすものとしての良心、および相互的な尊敬と信頼への志向。

性がある。薬剤師は、薬を作るのにかかった費用の10倍の値段で薬を売っている。夫のハインツは知り合い全員から借金をしたにも関わらず、半分しか集めることができなかった。そこで薬剤師に、自分の妻が死にかけていることを話し、安く売ってくれるか、残りを後払いにできないか頼んだ。しかし、薬剤師は「ダメだ、私とその薬を発見したんだし、薬で金儲けをするつもりだからだ。」と拒否したため、ハインツはやけを起こして薬局に押し入り、妻のためにその薬を盗み出した。果たしてハインツはそんなことをして良かったのか、理由も答えて下さい。』という、盗みを働いて妻を助けるか、見殺しにするかという二者択一を迫る問題である。

この問いにどう答えるかに関連して、Table 1に基づけば、功利主義的な観点は段階5（他者の意志や権利の冒涇を全般的に避けること、大多数の意志と幸福に関して定義される。）、義務論的な観点は段階6（方向づ

けをなすものとしての良心、および相互的な尊敬と信頼への志向。）に対応すると推測できる。これが事実であれば、社会を志向するのは水準2（段階3、4）になってからと考えられる。しかし、Kohlberg & Kramer (1969)によれば、年齢層20～24才において、比率的に最も多いのは段階4であり、それ以上加齢しても比率は変化しない。社会が様々な道徳性発達段階の人を包含しているため、功利主義と義務論のジレンマという枠組みでモラル・ジレンマを捉えることができる成人は多くないことになる。

Kohlberg理論は道徳の発達の側面に着目した示唆的のものである。ただし、ハインツのジレンマのように、薬を盗むか妻を見殺しにするかの、どちらの選択を採るかではなく、その結論に至るまでの思考プロセスを検討したものである (Smetana, 1994)。実際の行動判断を規定するのは、道徳的な発達段階に基づくのではなく、個人の態度や信念による影響

が大きいのではないか。

以上を踏まえ、本研究ではこれまで倫理学の領域で議論されてきた、命の選択を迫られるモラル・ジレンマ状況における、行動判断と態度との関連を明らかにする。具体的に、ルール違反（e.g., 小嶋・谷・北折, 2015）や迷惑行為と共感性との関連（e.g., 小池・吉田, 2007）の主張に基づき、態度や共感性との関連を検討する。

## 【方法】

**調査対象者** 金城学院大学の学生105名を対象とした。平均年齢は19.14歳であった。調査時期は2019年10月に、共通教育科目の講義を受講する学生を対象に、授業時間中に質問紙調査を実施した。これにより、特定の学部が偏っているという可能性は排除されている。

**手順** 質問紙の設問構成は、大きく2つに分けられている。まず、行動判断に関する質問のシナリオⅠ～シナリオⅢの3項目は、Philippa（1978）のTrolley problemを元に、異なる条件をそれぞれ独自に設定した。行動判断に関する質問のシナリオⅣ～シナリオⅦの4項目は、独自に作成されたものであり、「はい」「どちらかという、はい」「どちらかという、いいえ」「いいえ」の4件法で回答するよう求めた。また、態度は、道徳的態度尺度（手島・安保, 2017）から12項目を使用した。共感性は、多次元共感性尺度（鈴木・木野, 2008；桜井, 1988）から8項目を用いた。いずれについても、「まったく当てはまらない～非常に当てはまる」の6件法で回答を求めた。

各シナリオの教示文をまとめたものをTable 2に示した。

## 【結果】

**態度に関する因子分析** 態度に関する20項目について、因子分析（最尤法, Promax回転）を行った。固有値の減衰傾向（固有値は6.03 → 2.57 → 2.19 → 1.24と減少した）と解釈の可能性から、3因子を抽出した。因子負荷量.47以上の項目を採用し、いずれの因子にも低い値を示した項目は除外した。この3因子により、全分散の53.97%を説明できる。第1因子は、「18. 日本社会の一員としてその発展に貢献したい」「14. 社会の一員として、積極的にその形成に関わろうとする」「15. 社会全体の利益のために尽くす精神を持っている」などに高い因子負荷量を示しており、社会への貢献に関する項目であるため“社会貢献”因子と命名した。第2因子は、「8. 困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない」「3. 他人が失敗しても同情することはない」「1. 悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげなくなる」などに高い因子負荷量を示しており、共感性に関する項目であるため“他者への共感”因子と命名した。第3因子は、「10. 相手の個性や立場を尊重する」「11. 物事のさまざまな見方や考え方に寛容である」「12. 思いやりの心を持って人と接する」などに高い因子負荷量を示しており、寛容さに関する項目であるため“他者受容”因子と命名した。

なお、各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子（集団貢献） $\alpha = .88$ 、第2因子（他者への共感） $\alpha = .81$ 、第3因子（他者受容） $\alpha = .76$ であり、いずれも十分な信頼性があると結論した（Table 3）。

**行動選択の集計結果** それぞれのシナリオにおける、「はい」、「どちらかという、はい」、「どちらかという、いいえ」、「いいえ」の回答を集計したものをTable 4に示す。シナリオⅤ以外の6つのシナリオについて有意

Table 2 調査で設定したシナリオ（教示文と設問）

## シナリオⅠ

暴走したトロッコが線路上を走っています。トロッコの進行方向の線路は二股に分かれています。片方の線路上には見知らぬ5人、もう片方にも見知らぬ人が1人います。

あなたは、その見知らぬ1人が凶悪事件を起こした元受刑者であることに気づきました。その人は、最近刑期を終えて出所していました。

今、あなたの前にはトロッコの進行方向を変えるレバーがあります。レバーを動かさなければこのまま5人がいる線路へ、レバーを動かすと元受刑者がいる線路をトロッコは進むことになります。トロッコを止める手段はなく、他の人に助けを求めることはできません。レバーを動かさなければ5人が、レバーを動かせば元受刑者が轢かれることになります。

設問1 あなたはレバーを動かしてトロッコの進行方向を変えますか？ 下記の内一つを選び○をつけてください。

## シナリオⅡ

暴走したトロッコが線路上を走っています。トロッコの進行方向の線路は二股に分かれています。片方の線路上には見知らぬ5人、もう片方には、あなたの大切な人（家族・友人など）が1人います。

今、あなたの前にはトロッコの進行方向を変えるレバーがあります。レバーを動かさなければこのまま5人がいる線路へ、レバーを動かすと大切な人がいる線路をトロッコは進むことになります。トロッコを止める手段はなく、他の人に助けを求めることはできません。レバーを動かさなければ5人が、レバーを動かせば大切な人が轢かれることになります。

設問2 あなたはレバーを動かしてトロッコの進行方向を変えますか？ 下記の内一つを選び○をつけて下さい。

## シナリオⅢ

暴走したトロッコが線路上を走っています。トロッコの進行方向の線路は二股に分かれています。片方の線路上には見知らぬ5人、もう片方には、あなたの大切な人（家族・友人など）が1人います。しかし実は、あなたの大切な人は大病を患っており、長くは生きられないと医師に言われています。

今、あなたの前にはトロッコの進行方向を変えるレバーがあります。レバーを動かさなければこのまま5人がいる線路へ、レバーを動かすと大切な人がいる線路をトロッコは進むことになります。トロッコを止める手段はなく、他の人に助けを求めることはできません。レバーを動かさなければ5人が、レバーを動かせば大切な人が轢かれることになります。

設問3 あなたはレバーを動かして、トロッコの進行方向を変えますか？ 下記の内一つを選び○をつけて下さい。

## シナリオⅣ

あなたは、紛争地域で医者をしています。そこでは、死に至る伝染病が蔓延しています。その伝染病は脳の神経に影響し全身に激痛が走ります。激痛を抑えるには、伝染病を治す必要があり、痛みだけを抑えることはできません。

ある日、地域民と同じ管轄の医者で同僚の2人が伝染病にかかってしまいました。助かるには早急に治療のための薬を摂取する必要があります。薬は病院から定期的に支給されます。しかし今、この地域には薬が1つしかなく、次の配給もすぐには届きません。激痛が走ってから、どの程度の期間で死に至るかは個人差があります。

あなたはこの伝染病のワクチンを開発中です。ワクチンを作るには、あと1体の被験体（伝染病患者）が必要で、完成には伝染病患者が亡くなった後、解剖する必要があります。ワクチンを完成させれば、伝染病の蔓延を防げますが、この管轄にはあなたと伝染病にかかった同僚の2人しかいません。同僚と共同で作業すれば短期間で作れますが、1人では時間がかります。

同僚に薬を摂取させれば、ワクチンを早急に行うことができるため、感染被害の拡大を防ぐことができますが、地域民は激痛に苦しみながら死んでしまいます。

設問4 あなたは、同僚に薬を摂取させますか？ 下記の内一つを選び○をつけて下さい。

## シナリオⅤ

あなたは紛争地域で医者をしています。そこでは死に至る伝染病が蔓延しています。その伝染病は脳の神経に影響し全身に激痛が走ります。激痛を抑えるには伝染病を治す必要があり、痛みだけを抑えることはできません。

ある日、地域民と同じ管轄の医者で同僚の2人が伝染病にかかってしまいました。伝染病にかかった場合、助かるには早急に治療のための薬を摂取する必要があります。薬は病院から定期的に支給されます。しかし今、この地域には薬が1つしかなく、次の配給もすぐには届きません。激痛が走るようになってから、どの程度の期間で死に至るかは個人差があります。

この伝染病にかかった同僚には障害があり、先天的に痛みを感じないため、伝染病にかかっても痛みを感じることはありません。

あなたはこの伝染病のワクチンを開発中です。ワクチンを作るには、あと1体の被験体（伝染病患者）が必要で、完成には伝染病患者が亡くなった後、解剖する必要があります。ワクチンを完成させれば伝染病の蔓延を防げますが、この管轄にはあなたと伝染病にかかった同僚の2人しかいません。同僚と共同で作業すれば短期間で作れますが、1人では時間がかります。

同僚に薬を摂取させれば、ワクチンを早急に行うことができるため、感染被害の拡大を防ぐことができますが、地域民は激痛に苦しみながら死んでしまいます。

設問5 あなたは、同僚に薬を摂取させますか？ 下記の内一つを選び○をつけて下さい。

## シナリオⅥ

あなたは、紛争地域で医者をしています。今、敵の兵士たちが近くを徘徊していますが、運よく隠れることができました。あなたが隠れている場所には、地域の子供たち数人と赤ちゃんがいます。

すると、赤ちゃんが泣き始めてしまいました。このままでは敵の兵士に見つかり、全員殺されてしまいます。あなたが赤ちゃんの口を手でふさぐことで、赤ちゃんの泣き声が漏れることを防ぐことができます。赤ちゃんは呼吸ができず死んでしまいますが、あなたと地域の子供たちは敵の兵士に見つからず、助かることができます。

設問6 あなたは赤ちゃんの口をふさぎますか？ 下記の内、一つを選んで○をつけて下さい。

## シナリオⅦ

あなたは、紛争地域で医者をしています。今、敵の兵士たちが近くを徘徊しています。あなたは運よく隠れることができました。あなたが隠れている場所には、地域の子供たち数人とあなたの大切な人（家族・友人など）が1人います。

あなたの大切な人は伝染病にかかっているため、激痛のあまり声を抑えることができません。このままでは敵の兵士に見つかり、全員殺されてしまいます。今あなたは薬を所持しておらず、治すことはできません。しかし注射器は所持しているため、血管に多量の空気を注入し、声が周囲に漏れることを防ぐことができますが、大切な人は急性循環不全のため（苦しむことなく）死んでしまいます。しかし、あなたと地域の子供たちは見つからず助かることができます。

設問7 あなたは大切な人に注射を打ちますか？ 下記の内、一つを選んで○をつけて下さい。

Table 3 性格特性に関する因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

	I	II	III
〈社会貢献因子〉 $\alpha = .88$			
18. 日本社会の一員としてその発展に貢献したい	.80	.07	-.06
14. 社会の一員として、積極的にその形成に関わろうとする	.80	-.01	.03
15. 社会全体の利益のために尽くす精神を持っている	.79	.00	-.11
17. 所属する集団の意義や目指す目的を、十分に理解していると思う	.70	-.08	.10
20. 集団の中で自分の役割と責任を果たしたい	.68	.06	-.07
16. 所属する集団の一員としての自覚がある	.65	-.16	.21
19. 働くことを通じて社会に貢献したい	.61	.18	-.02
〈他者への共感因子〉 $\alpha = .85$			
8. 困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない	.13	-.76	.04
3. 他人が失敗しても同情することはない	-.05	-.76	-.02
1. 悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる	.07	.68	.03
4. 人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分に関係なくても応援したくなる	-.06	.62	.13
7. 傷ついた人を見ても、冷静な方である	-.04	-.61	.12
6. 自分よりも不幸な人たちには、優しくしたいと思う	-.14	.54	.04
2. 悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない	-.12	-.48	.07
〈他者受容因子〉 $\alpha = .76$			
10. 相手の個性や立場を尊重する	-.12	.03	1.01
11. 物事のさまざまな見方や考え方に寛容である	.07	-.09	.72
12. 思いやりの心を持って人と接する	.13	.25	.49
〈残余項目〉			
5. まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといなあとと思う	.14	.47	.09
9. 人を差別したり偏見を持って接したりしない	.01	.10	.42
13. 物事を自主的に判断する	.26	-.20	.24
	因子間相関		
	I	II	III
	-	.42	.24
		-	.28
			-

Table 4 各シナリオの回答者数

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	$\chi^2$
シナリオ I	45	40	7	13	41.40 **
シナリオ II	5	5	20	75	126.43 **
シナリオ III	6	15	41	43	39.42 **
シナリオ IV	53	41	5	6	68.37 **
シナリオ V	31	29	29	16	5.44
シナリオ VI	20	62	13	10	66.92 **
シナリオ VII	23	37	31	14	11.38 **

※数値は人数

\*\*  $p < .01$

差が見られた。したがって判断が分散し、特定の選択に偏ることがなかったのは、シナリオ V のみという結果となった。

**態度との関連** 態度に関する因子分析結果、

抽出した3因子それぞれについて、尺度得点を算出した。尺度得点を従属変数とし、シナリオ別に、どう回答したのかを独立変数とした、対応のない一要因分散分析を実施した。

シナリオ別に結果を示す (Table 5 ~11)。

シナリオ I は、3つの因子共に、有意差は見られなかった。すなわち、このシナリオでどのような行動判断を採ったのかと、本研究で用いた態度因子の間に、差異は見られなかった。

シナリオ II は、3つの因子共に、有意差は見出されなかった。すなわち、このシナリオでどのような行動判断を採ったのかと、本研究で用いた態度因子の間に、差異は見られなかった。

シナリオ III は、3つの因子共に、有意差は検出されなかった。すなわち、このシナリオでどのような行動判断を採ったのかと、本研究で用いた態度因子の間に、差異は見られなかった。

シナリオ IV は、他者への共感因子に傾向差が見られ ( $F(3, 100) = 2.31, p < .10$ )、はい・いいえのいずれかの回答をした群よりも、ど

ちらかと言えばはい (いいえ) と回答した群の方が、高い値を示していた。これ以外の2因子に、有意差は見出されなかった。

シナリオ V は、3つの因子共に、群間に差は見られなかった。すなわち、このシナリオでどのような行動判断を採ったのかと、本研究で用いた態度因子の間に、差異は見られなかった。

シナリオ VI は、他者への共感因子に傾向差が見られ ( $F(3, 100) = 2.78, p < .05$ )、はいよりもいいえの否定的な方向に回答をした群の方が、より高い値を示した。これ以外の2因子に、有意差は見出されなかった。

シナリオ VII は、他者への共感因子に有意差が見られ ( $F(3, 100) = 2.77, p < .05$ )、どちらかと言えばいいえの回答をした群が、他の群と比べて低い値を示していた。これ以外の2因子に、有意差は見出されなかった。

Table 5 シナリオ I の回答別に見た各因子における尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.62 (.82)	3.85 (.61)	3.49 (.51)	3.54 (.97)	1.07
他者への共感	3.89 (.81)	3.99 (.45)	3.70 (.41)	3.44 (1.06)	2.10
他者受容	4.56 (.85)	4.49 (.53)	4.81 (.42)	5.00 (.65)	2.01

※ ( ) 内は標準偏差

Table 6 シナリオ II の回答別に見た尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.86 (1.17)	3.83 (.69)	3.82 (.68)	3.63 (.75)	.50
他者への共感	3.35 (1.56)	3.60 (.35)	3.96 (.47)	3.89 (.72)	1.22
他者受容	4.75 (1.00)	4.47 (.73)	4.40 (.59)	4.66 (.72)	.84

※ ( ) 内は標準偏差

Table 7 シナリオ III の回答別に見た尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.95 (1.07)	3.86 (.72)	3.71 (.69)	3.56 (.77)	.89
他者への共感	3.29 (1.45)	3.88 (.62)	3.91 (.51)	3.88 (.79)	1.35
他者受容	4.60 (.89)	4.49 (.58)	4.60 (.69)	4.65 (.76)	.19

※ ( ) 内は標準偏差

## 【考察】

本研究では、命の選択を迫られるモラル・ジレンマ状況における、行動判断と態度、特に共感性との関連を明らかにするため、独自のシナリオを作成し、行動判断を求める質問紙調査を行った。各シナリオに対する回答を独立変数とし、態度に差異が見られるかどうかについて分析を行った結果から、以下考察を行う。

**行動選択者数について** それぞれのシナリオで、人数に大きな偏りが見られた。シナリオⅠとシナリオⅡ、シナリオⅢを総合してい

えることとして、命の選択が対象の特性に強く規定されているということである。すなわち、見知らぬ5人を救うためにレバーを引く先にいるのが、シナリオⅠでは凶悪犯の元受刑者であり、シナリオⅡでは自分にとって大切な人、シナリオⅢではその大切な人が大病で余命がないという設定であった。集計の結果、シナリオⅠではレバーを引く人がおおよそ8割に上るのに対し、シナリオⅡでは1割以下であり、シナリオⅢであっても2割程度であった。明らかに大切な人1人を助けるため、5人の見知らぬ人を見殺しにしており、

Table 8 シナリオⅣの回答別に見た尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.61 (.79)	3.72 (.67)	3.86 (1.22)	3.93 (.53)	.50
他者への共感	3.72 (.82)	4.05 (.52)	4.18 (.60)	3.58 (.79)	2.31 †
他者受容	4.72 (.73)	4.45 (.59)	4.87 (.87)	4.50 (.98)	1.42

※（）内は標準偏差

† p&lt;.10

Table 9 シナリオⅤの回答別に見た尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.70 (.89)	3.69 (.72)	3.58 (.64)	3.86 (.73)	.48
他者への共感	3.68 (.97)	4.01 (.55)	3.94 (.58)	3.78 (.67)	1.22
他者受容	4.68 (.80)	4.56 (.60)	4.49 (.57)	4.75 (.91)	.60

※（）内は標準偏差

Table10 シナリオⅥの回答別に見た尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.63 (.86)	3.68 (.66)	3.53 (.57)	4.07 (1.16)	1.12
他者への共感	3.48 (.98)	3.95 (.58)	3.85 (.45)	4.13 (1.00)	2.78 *
他者受容	4.81 (.83)	4.57 (.62)	4.31 (.62)	4.83 (.96)	1.72

※（）内は標準偏差

\* p&lt;.05

Table11 シナリオⅦの回答別に見た尺度得点の平均と標準偏差

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ	F
社会貢献	3.71 (.91)	3.86 (.69)	3.56 (.58)	3.47 (.92)	1.32
他者への共感	3.76 (1.03)	3.98 (.47)	3.83 (.56)	3.79 (.99)	.52
他者受容	4.70 (.86)	4.72 (.65)	4.31 (.60)	4.81 (.69)	2.77 *

※（）内は標準偏差

\* p&lt;.05

明確に命の選択傾向が見られた。

近年、こうしたトロッコ問題は、モラル・マシーン課題という、自動運転車と絡めた検討が進んでいる (Maxmen, 2018)。Maxmenの研究は、主に比較文化的な検討であり、日本やフィンランドのように治安のよい豊かな国では、信号無視をしている歩行者は「死んでも仕方がない」という意見が多く、コロンビアのように貧富の差が激しい国では、ホームレスや犯罪者は見殺しにされることが多いといった知見を見出している。その一方で日本は「世界で最も功利主義的でない国」とされ、助かる命の数を重視せず、誰を助けるかという「質」を重視することが明らかになっている。本研究の知見も、こうした命の選択傾向の傍証といえよう。

しかしその一方で、自動運転車は属性による命の選択をするべきでないとする、ドイツの倫理規則20が示すように (リュトゲ, 2018)、いかなる状況においても、命を選択するべきでないという考え方が、今後主流となる可能性は排除できない。

シナリオⅣとシナリオⅤは、伝染病にかかった同僚の医師に対し、ワクチンを打つかどうかと言うシナリオであった。ここでは、同僚が苦しむ姿を目撃せねばならないかが操作されており、目にしなくてもいい場合、大きく判断が分かれることが明らかとなった。

北折・小嶋 (2018) は、裁判における量刑判断に関する検討を行っており、ワイドショーによるセンセーショナルな事件の報道が、市民の量刑判断の厳罰化につながっている。これなども、犯罪の様態を目にして被害者に共感することで、感情的に判断を行っている典型である。

もちろん、被害者の苦痛や理不尽さ、生じた被害の大きさなどを目にする機会がなければ、公正さが失われるといった問題があるた

め、裁判の秘匿化を支持するわけではない。本研究の知見により、苦しんでいる人を目にした時の感情が、実際の判断に大きく影響することが、改めて確認されたということである。裁判など、正義の公正さを担保する上で、このことは十分に留意する必要がある。

シナリオⅥとシナリオⅦの比較は、シナリオⅠ～シナリオⅤまでとは異なり、自身の手で他者の生死を左右する形ではなく、自分の命をも他者と共に天秤にかけるというシナリオである。シナリオⅥは、無実の子供と自分を含む多数の人のいずれを選択するかという課題であり、シナリオⅦは、大切な人と自分を含む多数の人、どちらを選択するかというものであった。ここでも興味深いのは、自分にとって大切な人に対し、注射をして殺害するという手を下すことに、躊躇を示す姿勢が浮き彫りとなった。

ここで留意しておかねばならないのは、大切な人というのが主観的であり、全ての人にとって大切な人という訳ではない点である。すなわちシナリオⅥでは、自分にとっては無関係な赤ん坊が泣いており、殺さなければ自分を含むグループ全員が敵に見つかって殺されるというシナリオが提示されている。この状況において、自分にとっては無関係な赤ん坊であっても、その母親や親族からすれば大切な子どもであり、殺害を望んだりもしない。このように、立場が違うことで大切な人が異なることが、命の選択に食い違いが生まれる原因となる。北折・小嶋・谷 (2020) は、子どもが飛び出して事故の回避が不可能である状況で、直進して子どもを撥ねるか、ハンドルを右に切って対向車線に飛び出し正面衝突するのかの、いずれを選択せねばならない状況を設定し、運転時と自動運転車搭乗時の行動判断について検討している。合理的な判断かどうかはさておき、この場面では自身が運

転していたり、自動運転車に搭乗していれば、子どもを助けたいと正面衝突を選ぶケースが多い。しかし例えば、自分の配偶者や子どもなど、大切な人が搭乗していた場合に、これらの人に危害が及ぶ可能性の高い、正面衝突を選ぶケースは少ないと予測される。命の選択において、何が正しい選択であるのかは立場によって大きく異なる。

**態度との関連について** 態度に関連した4つの因子を抽出し、各シナリオごとに行動判断を独立変数とした一要因分散分析を実施した。その結果、シナリオⅠ～Ⅲ、およびⅤについては、有意差が見られなかった。

シナリオⅣについて、他者への共感因子について有意差が見られ、はっきりと“はい”“いいえ”と回答していた群よりも、どちらかというとはいいえと回答していた群において、高い値を示す傾向が見られた。このシナリオでは、伝染病にかかった同僚の医師が、激痛に苦しむ姿を目撃せねばならない。すなわち、同僚と地域の住民のいずれもが苦しんでおり、いずれかしか救えないという状況での判断の揺らぎが、共感性の高さに反映されたと解釈できよう。

ただしこのシナリオにおいては、同僚に薬を摂取させることで、薬の開発を早めることができる。功利主義的な考えに基づけば、同僚を助けるという選択が合理的であろう。それにも関わらず共感性が高い群は、こうした合理的な確信に基づく判断を行うのではなく、感情的な要因で判断が揺らいでいるのではないかと考えられる。

シナリオⅥについては、はいと回答した群において、顕著に他者への共感が低いという結果を示した。シナリオⅥで手をかけねばならない赤ん坊は、静かにする様なだめたり言い聞かせたりが難しく、コントロールできない可能性も高い。そう考えると感情的なこと

は置いておいて、赤ん坊の首を絞めて殺す方が、功利主義的観点から見れば合理的であり、理にかなった選択である。よって、敵から逃れたいと考えている周囲の人に共感するのであれば、はい（赤ん坊を殺す）と答えた群の共感性が高くなると予測したが、結果は真逆であった。むしろ、生まれてすぐに殺されてしまう赤ん坊本人や、赤ん坊の母親の方に高い共感を示したと考えられる。共感性の対象が何に向いているのかは本研究で検討しておらず、今後もう少し検討を進める必要がある。

なお、シナリオⅦにおいては、どちらかといえはいえと回答した群において、もっとも他者受容が低かった。周囲に配慮したり寛容な人は、自分の大切な人に手をかけることにやや否定的であるといえるが、はっきりいいえと回答する群がより低いという訳でなく、こうした結果が見られた理由は不明である。今後さらに検討していく必要がある。

最後に、本研究で明らかにできなかった今後の課題についてまとめる。態度について、社会貢献因子は全てのシナリオにおいて有意差が見られず、提示したモラル・ジレンマ状況における命の選択との間に、関連は見られなかった。実際には、こうした選択を規定する態度は他にも多々あると予測される。今後さらに検討していく必要がある。また社会に目を向ければ、こうしたジレンマ状況は他にも沢山存在する。本研究では命の選択という、かなり究極的で重大な判断を求められる状況に回答を求めたことが、現実感を減じていた可能性もある。今後は選択課題を精選し、さらに検討を重ねていくことが必要であろう。

#### 【引用文献】

Bentham, J. (1948). *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. New York: Hafner

- Publishing Co.
- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 24, New York: Academic Press. Pp.201-234.
- Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Stanford University Press.
- Gilbert, D. T. (1995). Attribution and interpersonal perception. In A. Tesser (Ed.), *Advanced social psychology*. New York: McGraw-Hill. Pp.99-147.
- カント (1976). 篠田英雄 (訳) 道徳形而上学原論 岩波文庫
- 北折充隆 (2013). 迷惑行為はなぜなくなるのか? 「迷惑学」から見た日本社会 光文社新書
- 北折充隆 (2017). ルールを守る心 - 逸脱と迷惑の社会心理学 - サイエンス社
- 北折充隆・小嶋理江 (2018). 裁判員裁判におけるゲイナーロス効果に関する研究 金城学院大学論集 14, 13-21.
- 北折充隆・小嶋理江・谷伊織 (2020). 事故回避不能状況における行動判断に関する研究 (1) 一運転時と自動運転A I による比較 - 日本交通心理学会第85回大会発表論文集.
- Kohlberg, L. (1967). Moral and religious education and the public schools: A developmental view. In T. Sizer (Ed.), *Religion and public education*. Boston: Houghton-Mifflin.
- Kohlberg, L., & Kramer, R. (1969). Continuities and discontinuities in childhood and adult moral development. *Human Development*, 12, 93-120.
- 小池はるか・吉田俊和 (2007). 共感性と対人的迷惑認知, 迷惑認知の根拠との関連 - 行為者との関係性による違いの検討 - パーソナリティ研究 15, 266-275.
- 小嶋理江・谷伊織・北折充隆 (2015). 運転免許停止処分者講習の受講に関する実践的研究 - 講習前後の態度変化 - 31, 14-25.
- Maxmen, A (2018). Self-driving car dilemmas reveal that moral choices are not universal -Survey maps global variations in ethics for programming autonomous vehicles-. *Nature* 562, 469-470.
- Philippa, F. (1967). The Problem of Abortion and the Doctrine of the Double Effect. *Oxford Review*, 5, 5-15.
- Philippa F. (1978). *The Problem of Abortion and the Doctrine of the Double Effect in Virtues and Vices*. Oxford: Basil Blackwell.
- リュトケ, K. (2018). 講演会 自動運転車のための倫理: ドイツの事例から 千葉大学法学論集 32, 35-55.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係 - 多次元共感測定尺度を用いて - 奈良教育大学紀要 37, 149-154.
- Sandel, M. J. (2009). *Justice: What's the Right Thing to Do?* New York: Farrar, Straus and Giroux (マイケル・サンデル著, 鬼澤忍訳, 『これからの「正義」の話をしよう——いまを生き延びるための哲学』早川書房)
- Smetana, J. G. (1994). Commentary. *Human Development*, 37, 313-318.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成 教育心理学研究 56, 487-497.
- 手島啓文・安保英勇 (2017). 道徳的態度尺度の開発と信頼性・妥当性の検討 北海道心理学研究 39, 30.

### ※謝辞

本論文は、2020年度金城学院大学人間科学部多元心理学科卒業生、岩脇紗南による卒業論文のデータを、第一著者の責任で分析したものである。ここに記して感謝致します。